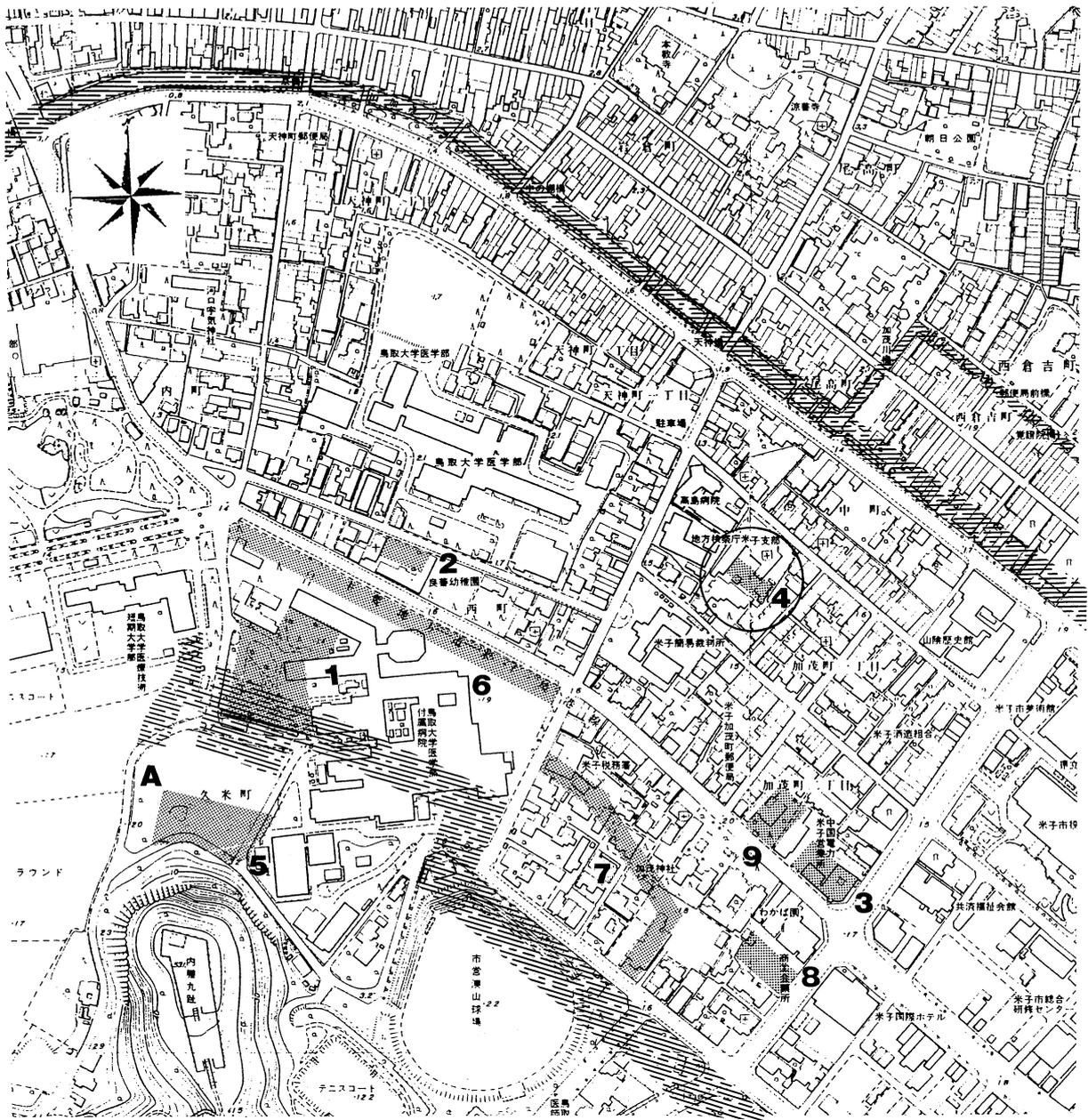


米子城跡 4



1995. 3

財団法人 米子市教育文化事業団



(S = 1 : 5000)



(S = 1 : 50000)

調査地の位置と周辺遺跡

- A 久米第1遺跡 (縄文・弥生・古墳・奈良平安・中世・近世)
- 1 米子城跡1 (古墳・奈良平安・中世・近世)
- 2 米子城跡2 (古墳・近世)
- 3 米子城跡3 (縄文・奈良平安・中世・近世)
- 4 米子城跡4 (弥生・平安～中世・近世)
- 5 米子城跡5 (久米第1遺跡に重複：縄文・弥生・古墳・奈良平安・中世・近世)
- 6 米子城跡6 (弥生・古墳・平安～中世・近世)
- 7 米子城跡7 (弥生・中世・近世)
- 8 米子城跡8 (弥生・古墳・平安～中世・近世)
- 9 米子城跡9 (協議中)

1 調査の概要

米子市加茂町1丁目16番地のマンション建設地において、事前の立会・試掘調査を行ったところ、米子城関係の遺跡の存在が確認されたので緊急の発掘調査を行った。調査は財団法人米子市教育文化事業団（理事長森田隆朝）が、株式会社広建（取締役社長 宇多寿一）の委託を受けて実施した。調査面積は240m²。調査期間は現地調査を1994年10月26日から11月8日まで、以後翌1995年3月31日まで整理報告作業を行った。調査費は金1,180,000円。原因者負担である。調査によって建物礎石列、溝、土坑、瓦溜り、陶磁器、瓦、漆器、金属製品、木製品等の遺構遺物・旧地形を検出した。近世米子城下町の形成や変遷を示すものである。調査に際しては、株式会社広建には調査費の負担をはじめ、工事日程の調整変更など多大な御理解と御協力を賜った。また、工事担当株式会社松村組には施設の利用等便宜を図っていただいた。記して謝意を表す。

調査担当・調査員：高橋浩樹（米子市教育文化事業団調査員）、杉谷愛象（米子市教育文化課主任） 調査補助：植佐知子（米子市教育文化事業団臨時職員） 調査協力：小泉千絵（米子市教育文化事業団調査員・県派遣調査員）、深田洋史（同前） 作業員：足立幸弘、遠崎礼子、岡本武志、柿田文子、倉敷みさ子、田中恵子、虎尾一明、仲田茂、長谷川節子、森田静香、山根礼吉 助言協力：伊野近富、大村雅夫、杉本良巳、園俊朗、田中秀明、船越元四郎、南前孝明、村上勇 整理：後中万里子、近藤智子、篠田明子、仲田いずみ（順不同）

2 米子城跡の調査

米子城関係の考古学的調査は1988年の久米第1遺跡が最初であり、その後「外堀で囲まれた区域」を「米子城関係区域」として理解し、開発等との調整を進めながら逐次実施してきている。今回調査は第4次に当たる。調査の成果は形成過程は勿論のこと、完成されたとされる近世以降の変遷についてもかなりの幅での変化のあったことを示し、大雑把ではあるが、中世期には飯山・湊山周辺、特に現在の医学部病院周辺を中心とした開発があり、次いで吉川・中村による拡充を経て池田（荒尾）へと続く変遷と広がり過程が具体的になりつつある。同時に、縄文時代前期初頭以降の原始古代遺跡の存在も確認され、低地部における開発がかなり古くから広範囲に行われていたことが明らかになってきている。

3 調査地

調査地は近世米子城の内堀と外堀にはさまれた外郭地域で、家臣団の居住区域となっていたところである。宝永6年（1709）の伯耆国米子平図、享保5年（1720）の湊山金城米子新府図では湿地の隣に『廃宅地』と記され、天明・寛政期（1781～1804）と思われる米子御城下図では『明地畑』、明治3年（1870）の絵図でも屋敷地状の区画はあるが、屋敷地にはなっていない。当初は武家屋敷として整備されたようであるが、早い時期に廃絶して水田・畑地に変わり、その後明治時代まで公式な形での屋敷地として利用はなかったようである。明治以降は水田となり、大正期に宅地として利用される。なお、「伯耆国米子平図」「湊山金城米子新府」では『廃宅地』の横に『私蔵奉行』と記され、半公的な箇所としての利用もうかがえるが、既に宅地の機能は失われているようである。因みに、『私蔵奉行』の〈私〉は事実上の米子城主であった荒尾氏に属することを示す。

4 遺 構

土坑 1 南東壁際断面に落込みを確認した。調査後の工事掘削によって明らかになった瓦溜りにつながるものと思われる。

土坑 2 径2.1m、深さ0.38mの凹形の浅鉢状を呈す。二段に掘り囲まれて中央部が10cmほど深い。砂混りの黒褐色～黒灰色粘質土が堆積していた。上面で伊万里片 2 (73・84) 等、埋土中位で肥前系陶器片 1 が出土した。

土坑 3 一辺2.5m、深さ0.3mの不整形方形を呈す。調査区南東側にあり、北西側を溝 1 によって切られる。上層に灰色シルト、下層に黄褐色腐蝕土が堆積しており、板状・棒状木製品、箸、唐津系片口 1 (62)、京焼風茶碗 1 (30) 等が出土した。

土坑 4 3.0×1.3m、深さ0.2mの不整形土坑。唐津皿、伊万里碗等が出土した。

溝 1 南西の沼沢地から北東方向に延び、上下二層の堆積が見られ、上層は木屑を多く含み、下層は黒灰色～黒褐色粘質土が堆積する。幅0.9～1.1m、深さ0.5m、底面標高-0.3m。土坑 3 を切る。青磁 (9)、唐津碗片 (36)、伊万里皿 (70) 等が出土した。

溝 2 やや蛇行しながら南西から北東方向に緩やかに下降する。幅0.5m、深さ0.2m、底面標高-0.08m。溝 3 と直交しこれを切る。

溝 3 沼沢地から一端北東に延び南西に屈曲して溝 5 と交わり、溝 1 へと通ずる。幅0.5m、深さ0.26m、底面標高0.2m。

溝 4 第 4～5 層を掘込む形で形成される。北西から南東に延び調査区中央部で屈曲し南に抜ける。北西側が広くて浅く、南東・南側が狭くやや深い。上下二層が認められ、上層の溝 4 a は炭混りの暗青灰色砂質土が堆積し、北西部幅3.0m、深さ0.3m、底面標高±0 m。南東・南部幅1.6m、深さ0.45m、底面標高-0.15m。北西寄りに石溜りがあり、間や周囲から瓦、唐津、高取、伊万里、青磁等が出土した。石溜りは標高-0.1～+0.2m内外に堆積する。溝の埋立てに使用されたものと思われる。下層の溝 4 b は溝 4 a とは間砂層により峻別され、腐蝕土混りの茶褐色～黒褐色粘質土が堆積する。北西部幅4.2m、深さ0.5m、底面標高-0.2m。南東・南部幅1.8 m、深さ0.6m、底面標高-0.3m。下部より煙管 (1)、唐津 (31・58)、高取、初期伊万里 (69)、その他 (31) 等が出土した。

溝 5 溝 1 の北西にほぼ平行して北東-南西方向に延び、南西は沼沢地にせり出す。上部に後世の石列が重複する。溝幅1.3～1.6m、深さ0.25m、底面標高-0.13m。溝底や裏込め層から瓦 (R12)、唐津皿、志野焼鉢 1 (25)、焙烙 1 等が出土した。

石列 溝 5 の上部に重複し、掘方は第 4 層を掘込む。60×35×30cm～70×40×30cm大の石が北東-南西方向に並び、建物礎石と思われる。裏込めは拳大の割石を使用する。石の上面標高は約0.4mで第 4 層上面高とほぼ一致し、この位置に生活面があったと思われる。

瓦溜り 東・南東隅の調査区域外で工事掘削中に検出した。瓦は土坑状の凹みに20～30cmの厚さで積み重なり、堆積は更に外側に広がっていた。軒平瓦・平瓦・軒丸瓦・丸瓦各種の瓦がある。瓦以外には交趾系陶器 1 点 (19) を採集したのみである。

沼沢状地形 調査地の南西側は傾斜し暗・黒褐色の泥が溜まり、木製品、唐津、青磁等の水平な堆積が見られた。瓦溜りのあった東・南東側にも広がっている可能性が高い。築城当初の旧地形を示すものであり、絵図に見える湿地はこの名残りと思われる。水位は約0.2m、深さは最深50cmを測る。

5 遺物

弥生土器、瓦質土器、土師器、陶磁器、瓦類、金属製品、木製品、古銭、自然遺物等がある。点数約800点、コンテナ30箱分である。弥生土器は2点、瓦質土器は1点のみである。陶磁器類は総点数265点で、唐津系52%、伊万里35%、輸入陶磁器5%、備前・瀬戸美濃・志野5%、その他京焼系・不明陶器等3%である。唐津の比率が高く、伊万里も古式のものも多く含む。後世のものもあるが、概ね16世紀後葉から17世紀代に中心を置く。

瓦類 (R1~18) 軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。溝4・溝5内をはじめ全体的な分布が見られたが、ほとんどは東側の瓦溜りの出土である。形態的に古式に属するものである。

軒丸瓦 連珠三巴文で圏線を持つI類(R1)と圏線を持たないII類(R2~R5)があり、II類は大小・連珠数で細分される。I類(R1)は連珠21、II a類(R2・R3)は19、II b類(R4・R5)は12~13である。法量は全径・外径・巴部径の順にR1が14.8・10.2・6.8cm、R2・R3が14.2・9.0・6.3~6.6cm、R4が15.7・11.3・8.0cm、R5が14.0・10.0・7.0cm。II b類のR4はやや大振りである。R3は完形で全長24.9cm。圏線や巴文の尾部が長く接続するI類・II a類が古く、巴文の頭が円く尾部の接続しないII b類が新しい。採集した中ではI類が一番多く、次にII a類。II b類は2点のみと少なく補修瓦の可能性が高い。

軒平瓦 中心飾りが三葉木葉文のI類(R10~R14)、退化した三葉木葉文のII類(R15・R16)、宝珠文のIII類(R17)があり、I類は脇飾りが三反転唐草文のI a類(R10・11)、大きくしっかりと三葉木葉文で二反転唐草文を持つI b類(R12)、やや小振りで粗略化した三葉木葉文で二反転唐草文を持つI c類(R13・R14)に細分できる。III類の文様は宝珠文・唐草文共に様式化され線も細い。法量は上弦幅21~23cm、高さ4.0~5.0cm。I a類とI c類は東側瓦溜り、I b類は溝5の最下層、II類は東側瓦溜りと溝4 a、III類は第3層の出土である。I a類・I c類・II類は基本的に東側瓦溜りに含まれる。

丸瓦 (R6~R9) 玉縁を持つもので、長さ27.5×幅14.8—高さ7.5cm、長さ26.7×幅14.7—高さ6.8cm、長さ26.0×幅14.2—高さ6.8cmの大・中・小がある。

軒平瓦I a類は米子城本丸下石垣内、伝飯山出土瓦、久米第1遺跡井戸7(報告書A類)等、I b類は伝米子城内出土瓦、I c類は島根県富田城跡、松江城等、III類は津山城本丸・二の丸出土品に類例を見ることができる。慶長期のものと考えられる。

軒丸瓦・丸瓦は内面に布袋紐痕や縫目圧痕と切り離し痕を残すが、切り離し技法では天正11年(1583)の大阪城築城後に普及したとされるコビキB手法がほとんどを占め、コビキAは僅かに軒丸瓦II b類中に1点が認められるのみである。コビキの類例は県内では若桜町鬼ヶ城、米子市久米第1遺跡、米子城跡1遺跡SK18等で確認されている。新古のA・B双方が存在するが差異も認められ、受容の時期や系譜についての検討が必要である。

金属製品 (1・2) 煙管(1)と飾り金具(2)がある。共に西南壁面の溝4下層より出土した。煙管は雁首・吸口一对で金鍍金を施す。雁首長さ55mm、口径15mm、立上り高さ2.0mm、胴径9.0mm。吸口長さ66mm、吸口径3.9mm(内径約1.5mm)、胴径9.0mm。飾り金具は家紋と思われる花菱紋を彫金した二個の菱形を横に連ね、表面には僅かに金鍍金の痕跡が残る。縦15mm、横30mm。裏面に止め具が付き、煙草入れの金具と思われる。

紋は漆碗の紋様と同類である。

古銭（3） 皇宋通宝（初铸1037年・北宋）。西南壁面の下部砂層から出土した。

弥生土器（4・5） 弥生中期中葉期の甕形土器2点。4は水平に屈曲して開く口縁で端部は丸い。口径（復元）21.0cm。5は外反する口縁で端部は厚く面を持つ。口径（復元）16.0cm。共に暗灰色を呈し、胎土は緻密で雲母を含む。

瓦質土器（6） 1点。内彎気味に開く平縁口縁の摺鉢で、3～4条の浅いすり目を施す。口径（復元）21.6cm。器表面の摩耗が激しい。西南壁面の下部砂層から出土した。

輸入陶磁器（7～19） 青磁碗・皿・壺・瓶9点（7～15）、白磁小坏1（16）、染付皿2（17・18）、その他交趾系陶器1（19）がある。青磁皿13は薄緑を呈す小型の菊花皿で口径9.4cm、器高2.5cm、施釉は薄い。15はやや厚手の皿で中央に菊花を施す。青磁瓶7は内外面に施釉し口縁部に漆継ぎ補修痕がある。白磁16はズブ掛け。染付皿18の文様は明るい青で南蛮系の様相を呈す。19は軟質の陶器皿で線刻し薄い緑釉と黄釉を施す。

備前（20～24） 摺鉢、壺片11点。摺鉢20は注口を持ち、肥厚拡張した内傾する口縁で端部内面を強くナデて段を有す。口径（復元）24.0cm。光沢のある赤褐色を呈す。真壁忠彦氏編年の第V期新に該当し16世紀後半期のものである。24は壺肩部である。

瀬戸美濃系（25～27） 天目、皿、鉢各1点がある。25は志野鉢で、口径（復元）22.0cm、厚手の白色釉を施し、内側に呉須で肉太の鋸歯状紋様を描く。26は美濃鉄釉天目。口径11.0cm、器高5.6cm。皿44は深緑を呈し、いわゆるモグサ土の胎土を持つ。

高取（28） 碗28は完形に近く、口径11.0cm、器高5.9cm。その他破片2点がある。

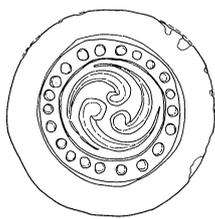
唐津（33～67） 碗（33～38）、皿（39～53）、茶入（54）、鉢（55～61）、摺鉢（63～67）、片口（62）等135点があり、絵唐津（40・41）もある。茶碗33は鉄釉で口径10.8cm、器高5.3cm。34は二次焼成を受け黒灰色を呈す。35・36は緑色釉。37・38は白色の緻密な胎土を持ち硬質である。38は三日月高台である。皿は口縁で素縁（42）・外反り（43・44）・溝縁（45・46）等、技法で胎土目積み（47～50）・砂目積み（51～53）、底部で碁笥底（47）・糸切平底（48）・三日月高台（49・52・53）等の各種がある。52・56は小鉢、60は食籠と思われる。茶入54は白胎土で内面無釉、底径2.8cmを計る。すり鉢63・64は口縁下に三角凸帯を付ける。薄手でくすんだ薄茶色を呈しやや軟質である。

伊万里（69～88） 皿（69～78）、小坏（79～84）、碗（86・87）、徳利（88）等93点。皿69はズブ掛けで中央にウサギを描き、口径14.7cm、器高3.3cm、底径5.6cm。漆継ぎによる補修を施す。70はぼかしを使用したやや厚手の皿。71は薄手の上物で、中央に鳥、底面に角福文を描き、口径14.6cm、器高3.4cm、底径8.4cm、器肉3mm。72は周縁部に飛鳥、中央に月字を描く。口径13.2cm、器高3.2cm。69・70が古式、71がやや新しい。小坏は端反りが多い。

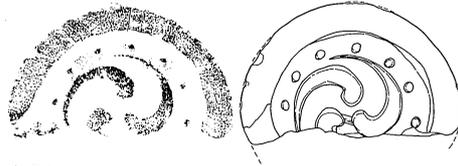
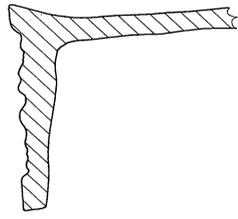
その他陶器 29～32は産地不明。29・30は良く締まり硬質。32は黄白色の胎土で軟質。

土師器（68） 皿（68）、焙烙各1点づつ。

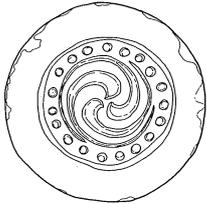
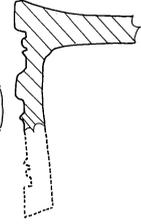
木器 漆碗2、下駄3、箸1、櫛1、その他（桶底、角材、板材等）がある。最下部の5・6層や土坑3からの出土である。下駄103は男物の露傍下駄で長さ22.0cm、幅7.5cm、高さ9.0cm、歯部幅11.3～12cm。対で出土した。104は男物の連歯下駄で長さ22.9cm、幅8～9.0cm。履き潰しており、後歯はほとんどすり減っている。漆碗95は外面黒、内面赤、外面に花菱紋を描く。箸（89～92）は長さ30cm、幅6～8mm、土坑3、溝4等より7本以上が出土した。櫛96は幅8.9cm、厚さ1.3cm、丈3.7cm。



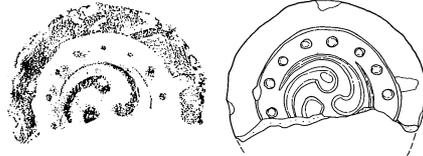
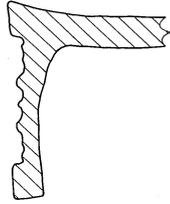
R1



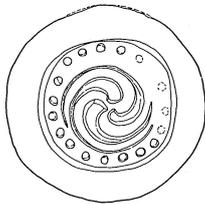
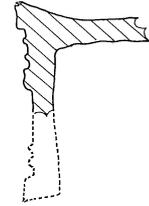
R4



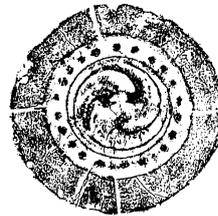
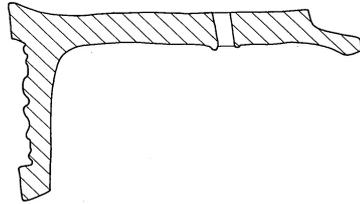
R2



R5



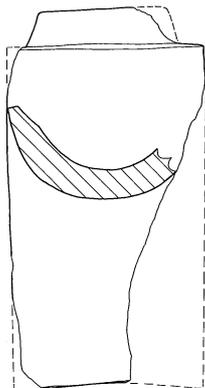
R3



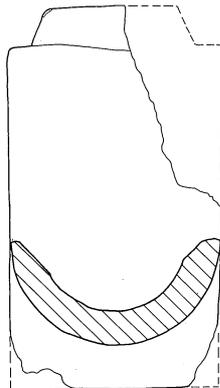
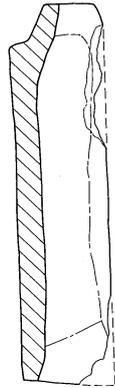
(R1)



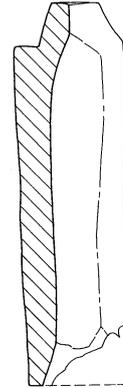
(R2)



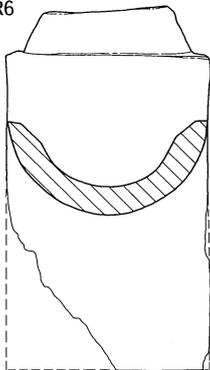
R6



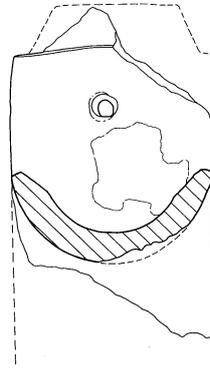
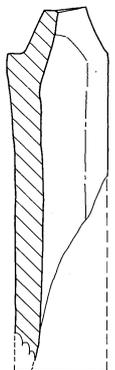
R8



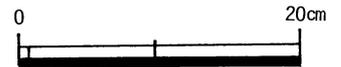
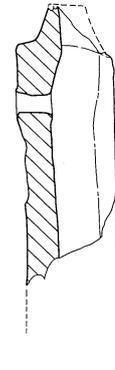
R	R	R	R	R	R	R	R
18	16	13	12	10	4	2	1
.
.	17	14	.	11	5	3	.
.
軒	軒	軒	軒	軒	軒	軒	軒
平	平	平	平	平	丸	丸	丸
瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ
類	類	c	b	a	b	a	類
					類	類	

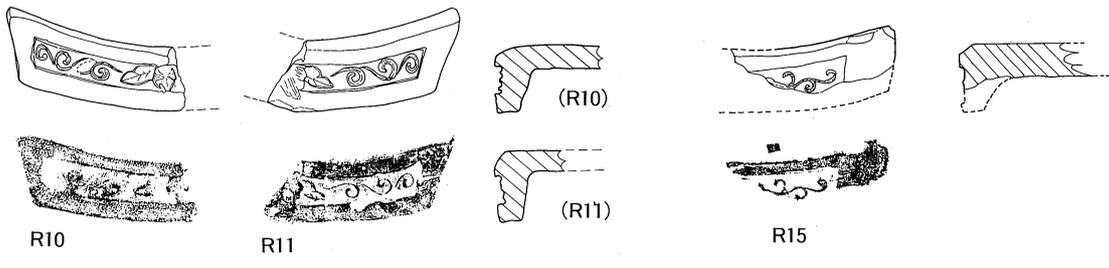


R7



R9

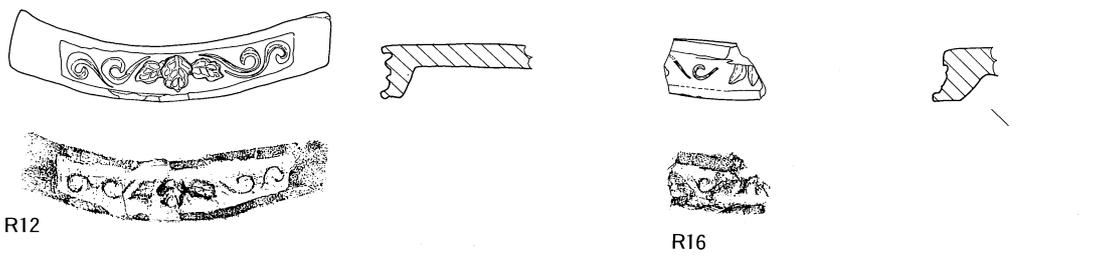




R10

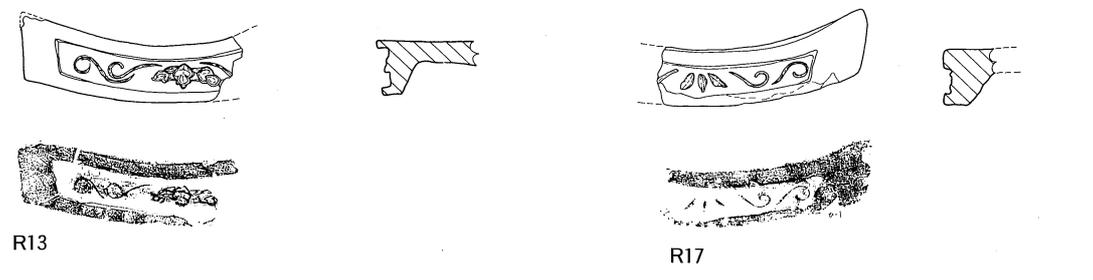
R11

R15



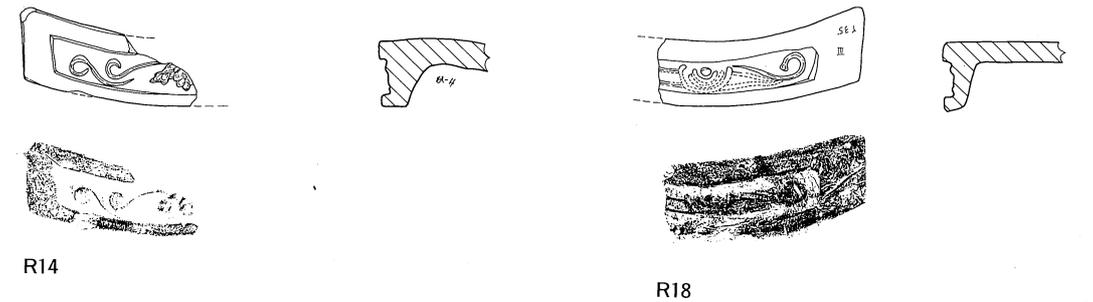
R12

R16



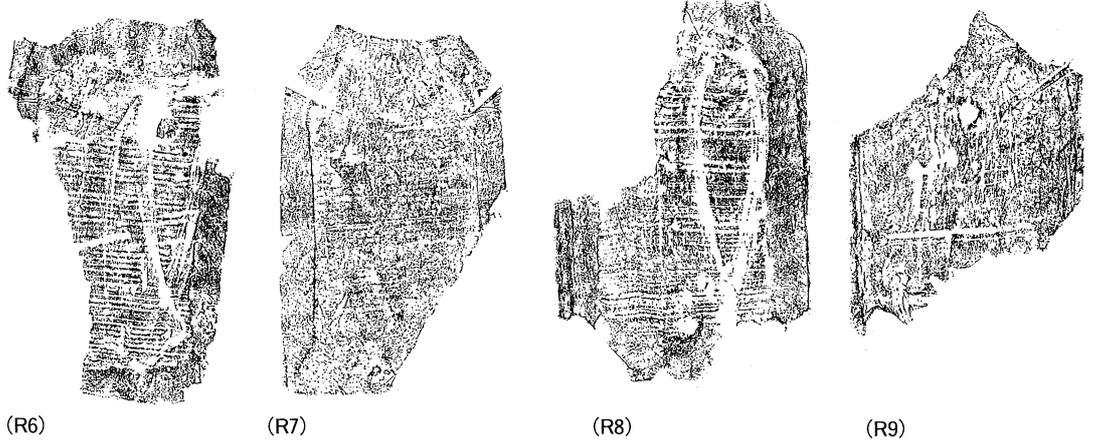
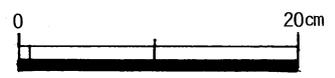
R13

R17



R14

R18



(R6)

(R7)

(R8)

(R9)

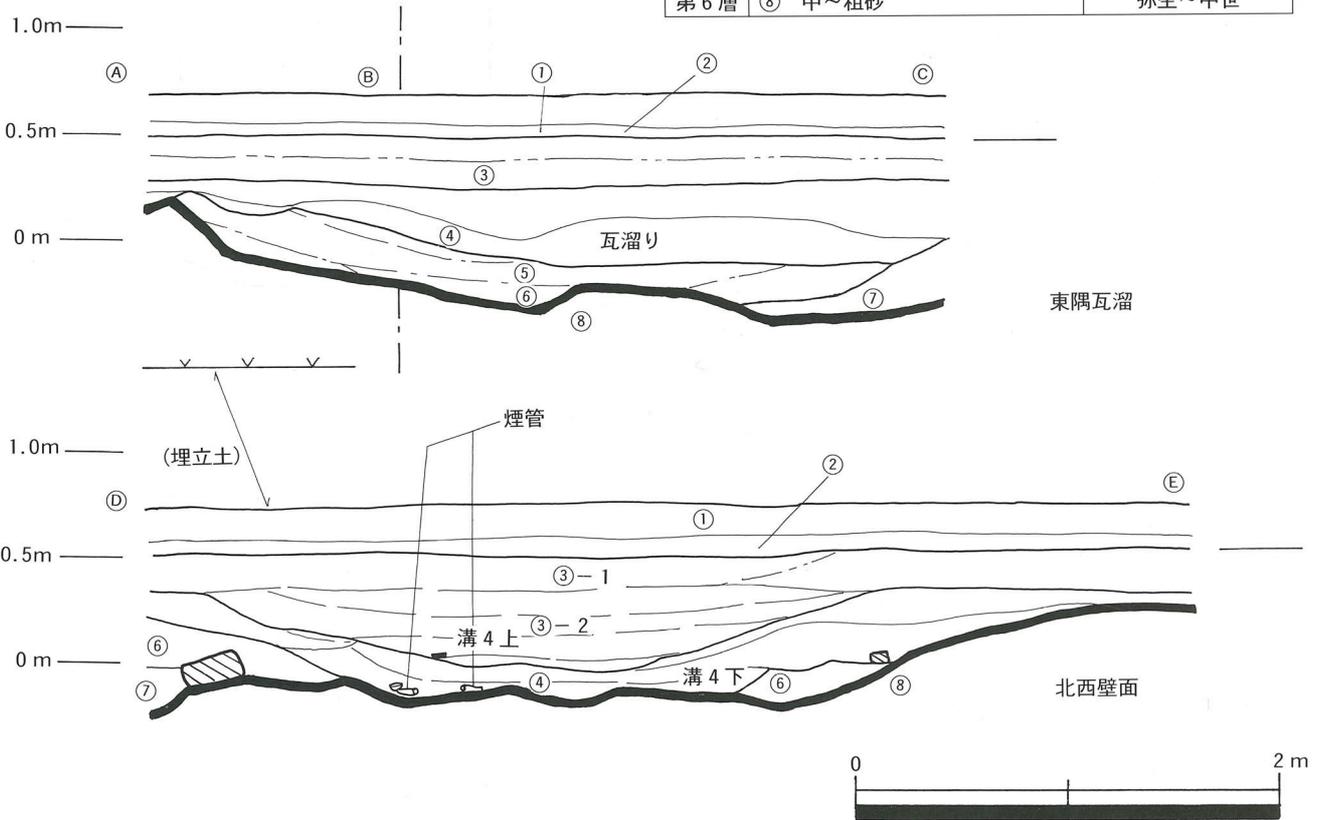


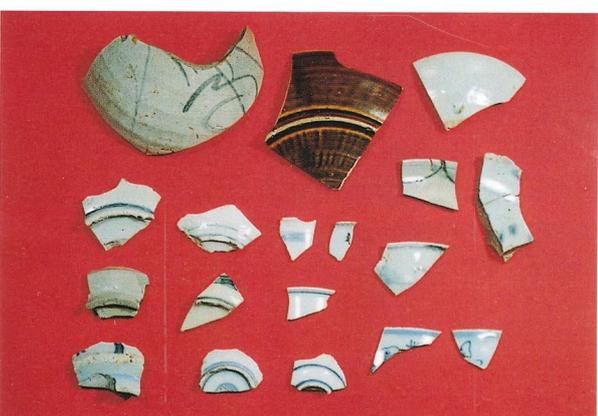
左上：伊万里一表・裏・漆継断面
左下：美濃天目・瀬戸皿・織部鉢



右上：軒平Ⅰ類-Ⅱ_a類-Ⅲ類・Ⅱ_b類
右中：櫛
右下：土坑関係唐津・伊万里

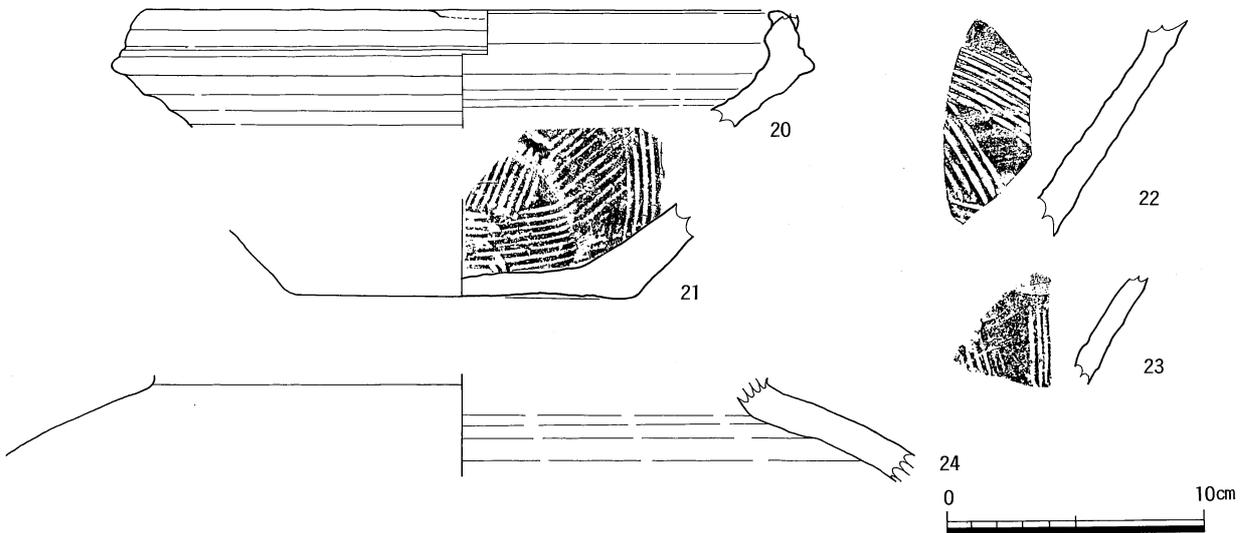
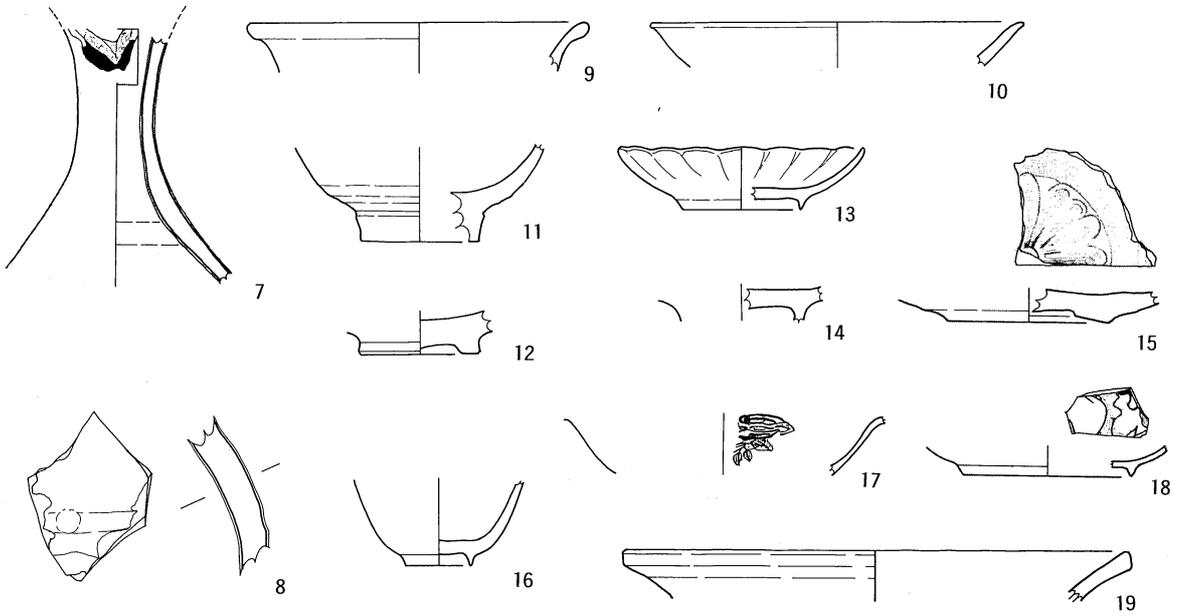
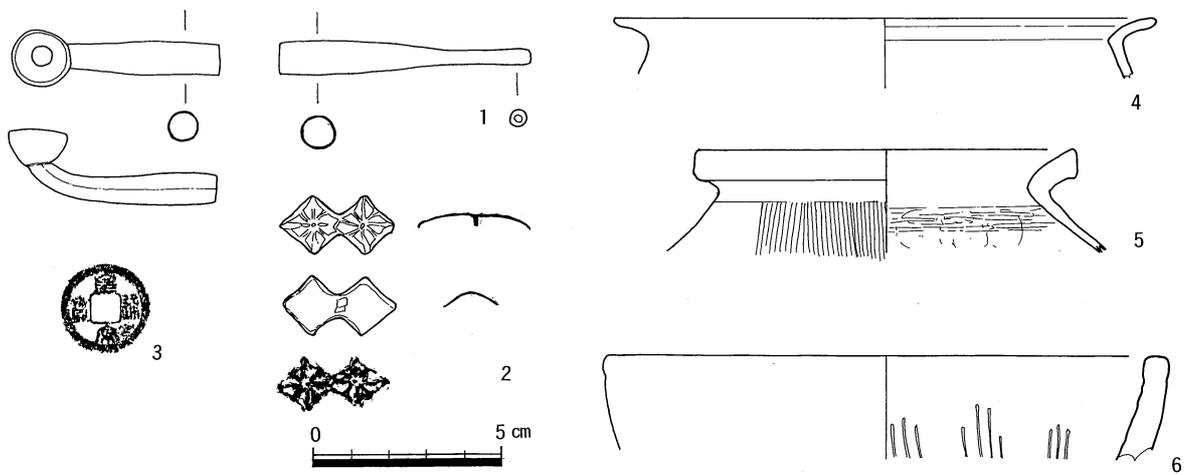
第1層	埋立土	大正期埋立
第2層	① 暗灰色砂質シルト (水田耕土)	明治期水田
	② 赤褐色砂質土	
第3層	③ 暗青灰色砂質シルト (炭含) (上部に赤褐色鉄分沈着)	江戸中～後期 (上部水田又は畑?)
第4層	④ 暗褐色砂質シルト	江戸前期
	⑤ 瓦溜 (腐蝕質含み、しまりなし、上半粘質、下半砂質強し)	
第5層	⑥ 灰褐色～暗灰褐色粘質シルト	～慶長頃
	⑦ 黒灰褐色粘質シルト	
第6層	⑧ 中～粗砂	弥生～中世

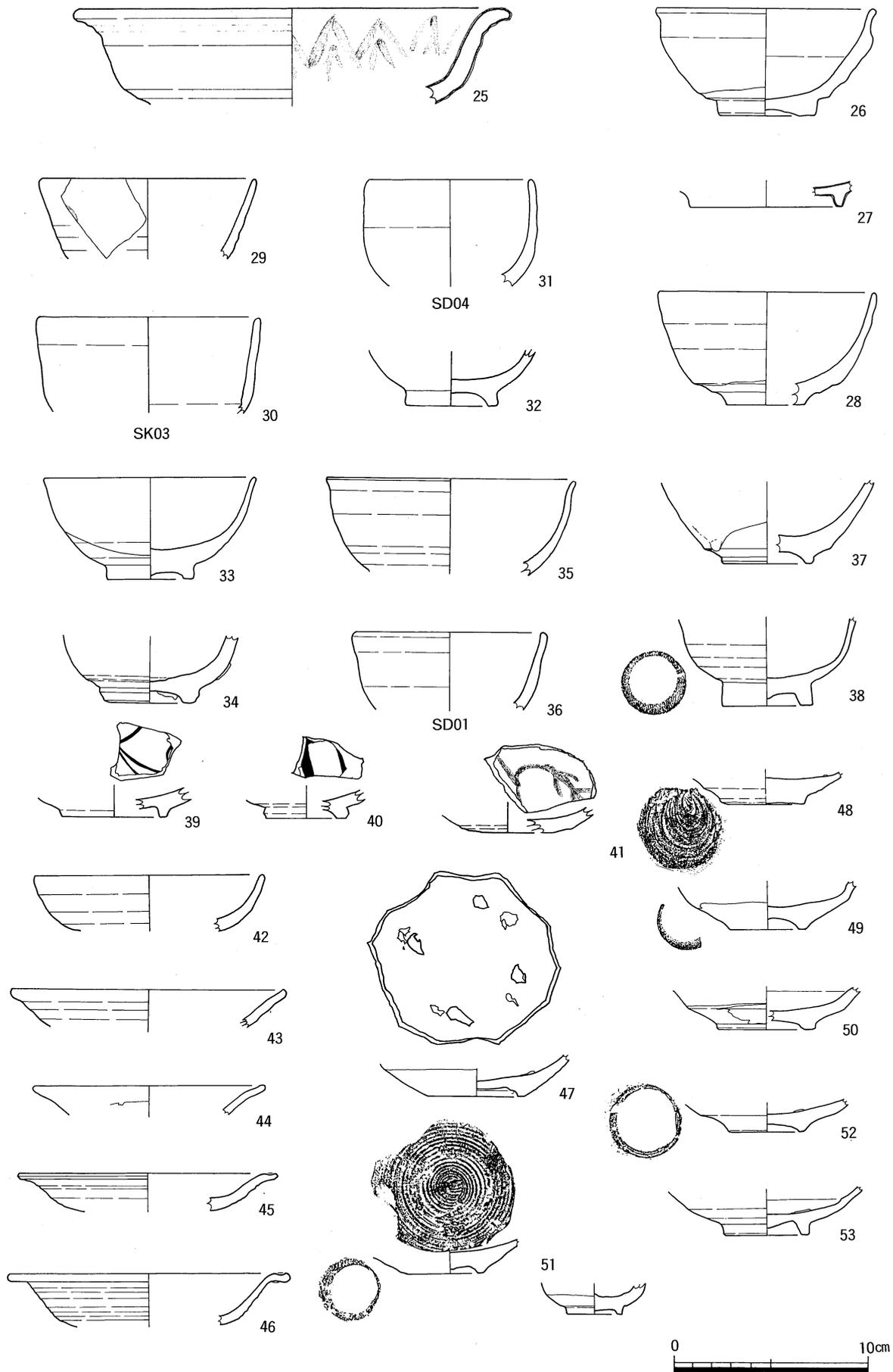


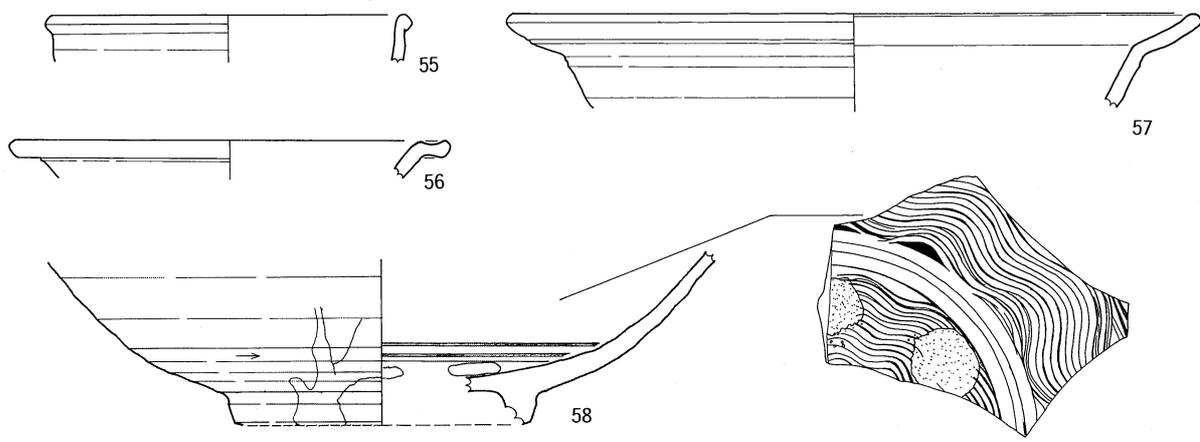


左上：青磁・白磁・輸入陶器
 中上：唐津皿
 中下：唐津碗・茶入・不明陶器

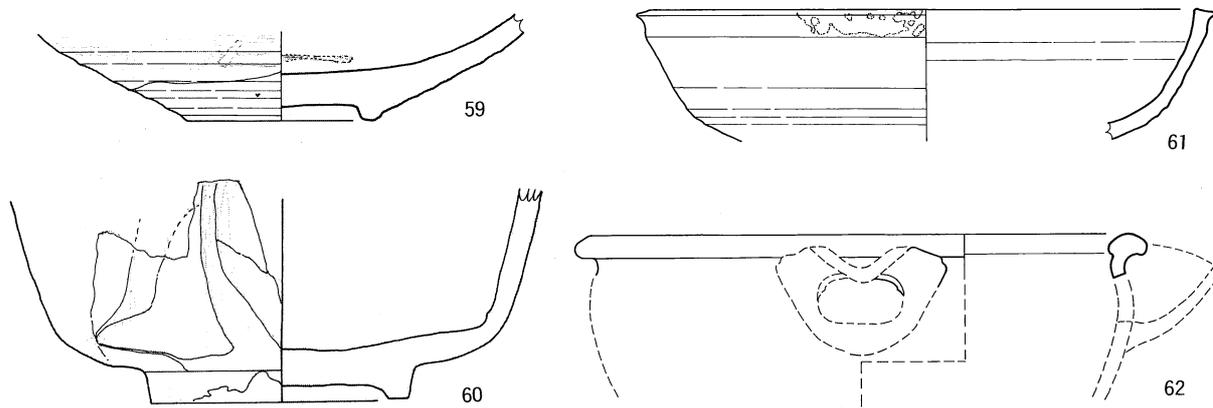
右上：唐津鉢
 左下：摺鉢-備前・唐津・瓦質
 右下：伊万里 徳久利・皿・碗・小坏



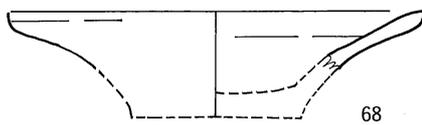
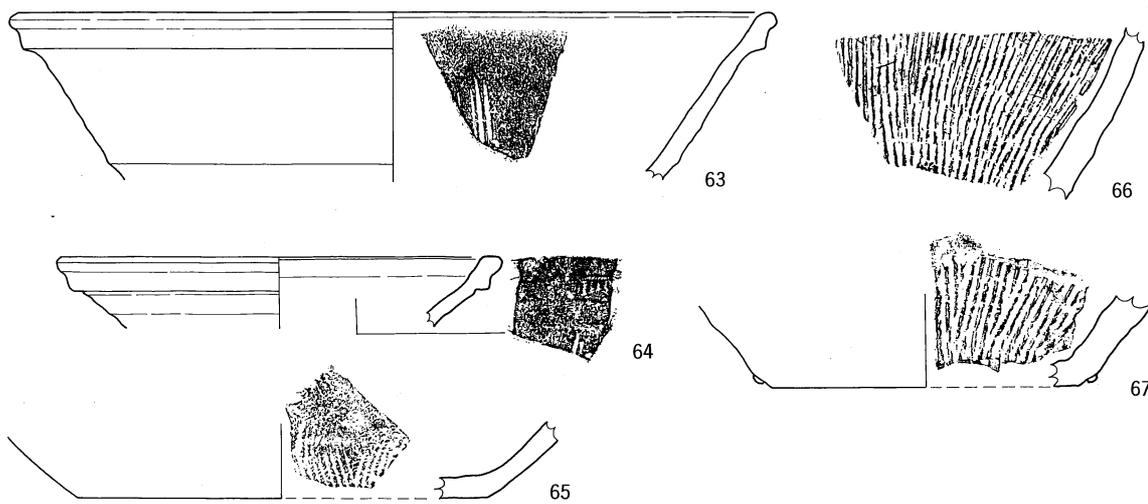


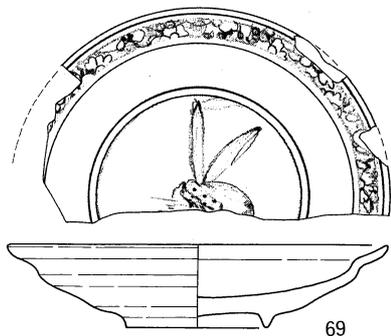


SD04下層



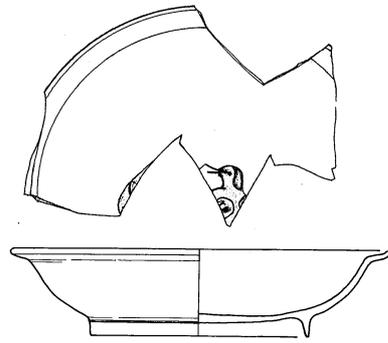
SK03





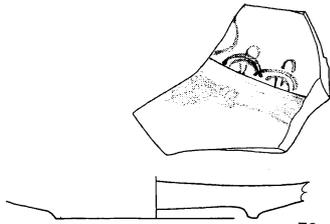
69

SD04下層



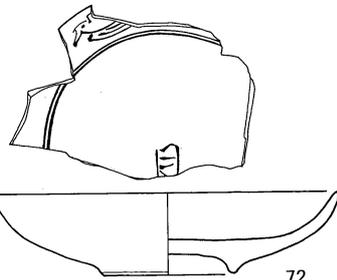
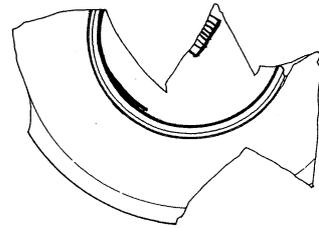
71

SD04上層

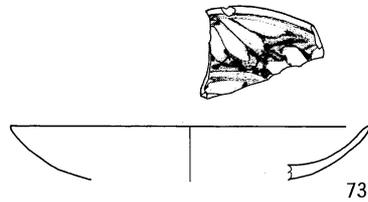


70

SD01

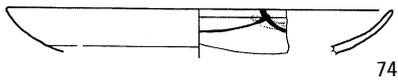


72

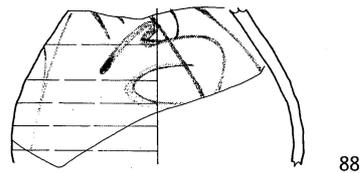


73

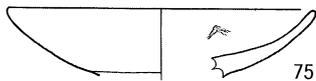
SK02



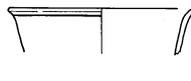
74



88



75



79



80



81



76



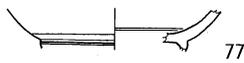
82



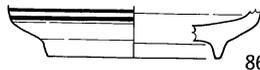
83



84



77



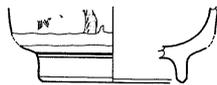
86



85



78

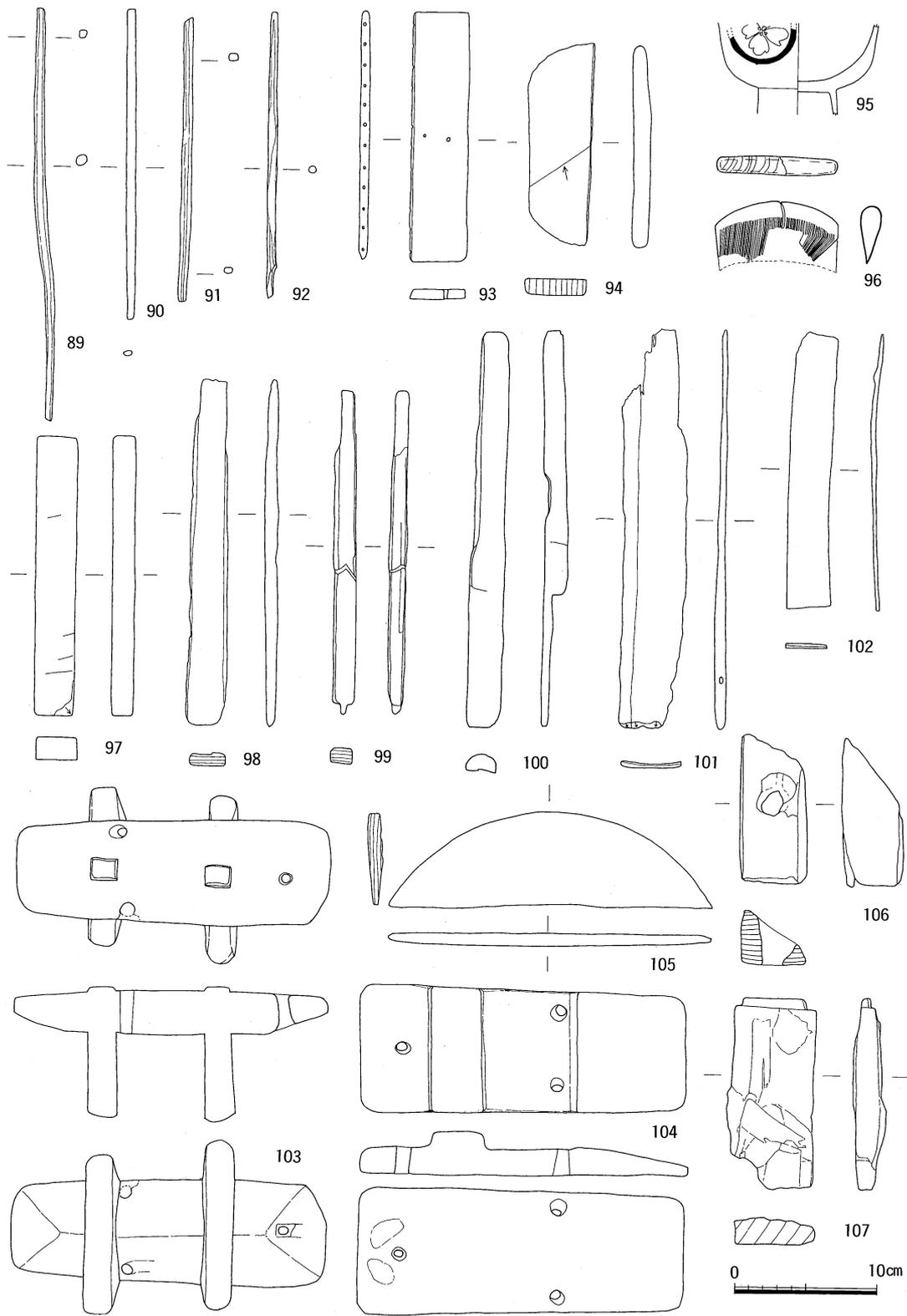


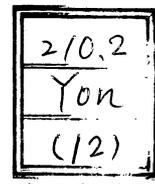
87



88







図書館

6 遺跡の形成と変遷

第1段階 第6層が該当し、弥生時代中期から中世までの幅がある。築城以前の旧地形であり、海・河川の影響を受け起伏に富んだ低地の砂丘地であったようである。

第2段階 第5層、土坑1・土坑3・溝1・溝3・瓦溜りが該当し、輸入陶磁器・瀬戸・美濃・備前・唐津・木製品（下駄・櫛・箸等）等がある。唐津の比率が高い。第1次の城下町形成期であり、用排水路が設けられ湿地の開発利用が図られている。16世紀末から17世紀初頭期と思われる。当時の地表面高は標高約0.2～0.3mである。

第3段階 第4層、溝2・溝4b・溝5が該当し、輸入陶磁器・唐津・初期伊万里等がある。利用は窺えるが大規模な造成は見られない。17世紀前葉から17世紀中頃と思われる。

第4段階 第4層上面～第3層下層、石列（建物礎石）・土坑2・土坑4・溝4aが該当する。輸入陶磁器・唐津・伊万里等があり、伊万里の比率が高くなる。第2次の城下町形成期であり、再開発が行われ、湿地部が大方埋まり礎石建物（石列）も建てられる。17世紀中葉から17世紀後葉と思われる。

第5段階 第3層・第2層が該当する。唐津・伊万里・石見系等の遺物があるが細片のみである。空地整理による耕作が行われたもので、18世紀前期（17世紀末か）から幕末・明治まで。第3層は畑地、第2層は幕末ないし明治期に水田として利用されている。

7 遺跡と城下町

近世米子城は、天文19年（1591）吉川広家が本格的に築城を始め、慶長6年（1601）に入府した中村一忠により伯耆18万石の拠点として整備され、その後の断絶・改易を経て、寛永9年（1632）鳥取池田藩の支城として筆頭家老荒尾氏の預かりとなり、明治まで続く。中村断絶以降、封地の減少等により城郭の維持管理は困難を極め、家臣団の屋敷地も荒廃が進み、寛文13年（1673）には城下侍屋敷の明（空）屋の処分が許可されている。また、元来の低湿地を中心に郭内の31町歩余が屋敷田として再開発されるが、これも水利不足から享保8年（1723年）には、約1/3が畑地に改められている。

今回調査の知見は、米子城下の変遷に符合するものであり、吉川・中村時代に、築城をきっかけとして開発整備されるが、断絶・改易に伴って衰退し、荒尾時代になって整地し直して利用したものの、やがて困難を来し再び廃絶したものと考えられる。

廃絶の時期は、先の「伯耆国米子平図」等の『廃宅地』の記述は、少なくともこの地がかつての〈宅地〉として認識されていたという事であり、絵図の時期よりさほど遠くない時点の可能性が高い。この廃宅とされた〈宅地〉は当然、再整備された宅地を指し、上記寛文13年の明屋処分許可との関連が注目される。ただ寛文13年は処分のきっかけであり、実際の廃絶はもっと早い時期で建物だけが残っていたとも考えられる。背景には、承応元年（1652）に初代荒尾成利が隠居し、二代成直に代替わりした事なども考えられる。

調査の成果は、不十分ではあるが城下町形成についての一資料を提供した。開発の開始時期を吉川に遡るか中村に求めるかは現状では断定し兼ねた。寺の造営など積極的な城下町経営を行った加藤氏の事跡の解明等と共に今後の調査課題である。今後、調査事例の増加や、出土遺物の検討（瓦の制作技法・系譜、遺物組成と時期など）、文書・絵図面との照合検討などを通じてより具体的な姿が明らかになることを期待したい。

報 告 書 抄 録

書名	米子城跡4				
副書名					
巻次					
シリーズ名	米子市教育文化事業団文化財報告書				
シリーズ番号	12				
編著者名	杉谷愛象				
編集機関	財団法人米子市教育文化事業団				
所在地	米子市中町20番地				
発行年月日	1995・3				
所収遺跡名	米子城跡				
所在地	米子市加茂町1丁目16番地				
コード	市町村	31-202	遺跡番号	719	
位置	北緯	35°25'44"	東経	133°19'44"	
調査期間	1994・10・26~1994・11・8				
調査面積	240㎡				
調査原因	マンション建設				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米子城跡	城館跡 (武家屋敷跡)	弥生時代 中世 近世	建物礎石1 溝5 土坑4 瓦溜り1 沢地状地形	弥生土器(中期)2 土師器 土師質土器 瓦質土器1 青磁・白磁 備前 瀬戸美濃 唐津 伊万里 木器(箸・下駄 椀・櫛他) 金属器(煙管・ 止金具他) 古銭2 瓦 (コンテナ30箱)	近世米子城の外郭地域。家臣団の居住地であったが早くに廃宅となる。遺物は概ね17世紀代が中心。中村氏~池田氏(荒尾氏)初期のものと思われる。

参 考 文 献

- 行田裕美 「津山城本丸・二ノ丸確認調査報告」『年報 津山弥生の里』第2号 1995 津山弥生の里文化財センター
- 『久米第1遺跡』 1989 米子市教育委員会
- 『米子城跡I』 1994 米子市教育委員会
- 『史跡松江城 昭和60年度保存修理事業報告書』 1986 松江市教育委員会
- 『史跡富田城跡山中御殿平昭和50年~54年度環境整備報告』 1980 広瀬町教育委員会
- 『富田川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1983 島根県教育委員会
- 『鬼ヶ城遺跡 若桜鬼ヶ城基礎資料整備事業総合調査報告書』 若桜町埋蔵文化財調査報告書 2 1991 若桜町教育委員会
- 『織豊城郭』創刊号 1994 織豊期城郭研究会
- 『米子城絵図面』米子城資料第1集 1990 米子市立山陰歴史館